

## 平成 30 年 7 月豪雨災害 現地レポート

所 属 水道部下水道整備課

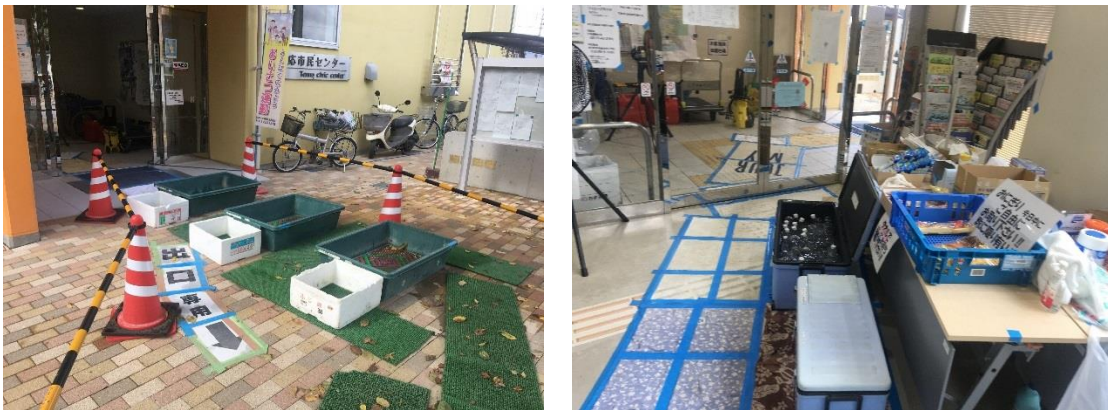
氏 名 原 江平

1 期間 平成 30 年 8 月 24 日 (金) から 9 月 1 日 (土) の 9 日間

2 場所 広島県呉市

### 3 活動内容

呉市は、広島県の南西部に位置しており、人口は約 22 万人で広島県の中では第 3 位である。山や海に囲まれており、街中以外の道路は勾配が急であり、沼津の静浦や西浦地区に似ている。被災してから約 1 ヶ月半経った現在では、主要な道路や河川などの土砂はある程度撤去されていたが、復旧が遅れている道路や河川もあり、崩壊した住宅や宅内の土砂などの撤去作業が遅れており、避難所生活をしている市民が多くいた。



天応市民センター避難所状況

災害復旧が遅れている中、効率良く現場を動かすために市役所職員 1 名は毎朝、被災程度が大きかった天応地区に行き、その地区で作業している業者や消防などの代表者全員を集め、ミーティングを行って現場の状況を常に把握し、効率良く土砂の撤去作業ができるように指示していた。また、ミーティング終了後に被災現場や避難所に行き、自分の目で現在どのような状況か把握していた。その他にも宅内の土砂撤去をしている市民や避難所にいる市民、自治会長などとも会話をすることで、被災した市民が「何を求めているか」「今何をし

ているか」把握して、それも配慮しながら業者に指示をして、現場を管理していた。

この職員の丁寧な行動により、時間の経過と共に現場での混乱が少なくなっていたが、実際にここまで行っている職員はベテランの職員一人だけであった。このような行動は、もっと多くの職員がやるべきことであり、特に若手職員は次の災害に備えるため同行して、勉強する必要があるはずなのだが、そのような現場の声、市民の声を自ら聴きに行っている人は少なく、自分の仕事で手一杯になっており、視野が狭くなっているように感じた。

私は、今回の被災地支援で自ら現場に行ったことで、「業者」「市民」との会話の重要性を強く感じた。市役所だけで出来る事は限られており、全てを完璧に復旧するには膨大な時間が掛かってしまうので、「業者」「市民」などとの協力は不可欠である。そこで普段の業務から積極的に現場に赴き「業者」や「市民」との会話を行って相互の距離を縮める必要があると感じた。これにより「住民サポート」や市民との信頼、協力関係などが向上し、被災時に重要な「助け合う関係」ができると考える。



土砂災害で崩壊した住宅



土砂災害で崩壊した道路



土砂で倒れた電柱